

幣原喜重郎「幣原喜重郎書簡」昭和23（1948）年1月1日

恭賀新年

久しく拝顔の機を得ず、

曩さきに日々けいがい警咳けいがいに接したる

当時の歓興を追想して

漫ろそぞろに寂寞せきばくの感に堪えず候。

御承知の通、小生今回政界の

時事に慨する所あり、決然

民主党と袂たもとを分ちて一己の

所信に邁進することと相成候。

固もとより現内閣の倒壊や

政権の帰趨きすうの如きハ毫も

胸中に存せず、唯国務進行

の円滑と政局安定の確保

を望む一念に外ならず候。

敗残の老骨を以て猿芝居を

演せむとするハ鳥澁おこの沙汰さたと

自覚致候へ共、一旦乗り出し

たる舟として仕向港に到着する迄

最早後退を許されざる内情

御諒察被 成下度候。  
ごりようさつなしくだされたくそうこう

時下ごかん互寒日頃の折柄、

一層の御自愛祈上候。

勿々頓首

元旦

喜重郎

石橋賢台 侍曹